



角川文庫

—4168—

悪魔の火祭

高木彬光



角川書店



昭和五十四年一月二十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

あくま ひまつり
悪魔の火祭

著作者

高木彬光
たかぎ あきみつ

発行者

角川春樹

印刷者

村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十八

発行所

●東京都千代田区富士見二ノ十三
●一〇二●東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店
かど かわ しょてん

電話東京篇七二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・本間製本

0193-133845-0946(0)

悪魔の火祭

高木彬光

て庫

4168

目次

第一章	奇妙な離婚の理由
第二章	生きている画廊
第三章	夫はそれを我慢出来ない
第四章	死体の胸に花笠 はながさ が
第五章	よろめき夫人の告白
第六章	装われたる殺人
第七章	火遊びの相手
第八章	女に心を許すまじ
第九章	必ず失敗する投資
第十章	竜宮閣にて

一五	一五	一六	一〇三	六	七	五	四	三	五
----	----	----	-----	---	---	---	---	---	---

第十一章 不敬罪にあたる改名

一七〇

第十二章 灰色の町の祭礼

一六六

第十三章 死体の背にも花笠はながさが

二〇二

第十四章 算盤そろばんにのる犯罪

二二七

第十五章 消え失せた男

二三三

第十六章 悪魔中空に死す

二六六

解説

中島河太郎 二六四

第一章 奇妙な離婚の理由

急行列車で十四時間という距離は、モードの世界では、一年の間隔を意味するらしい。

この女の着ている洋服は、たしかに去年あたり東京で流行ったような型だった。

だが、その軽い化粧の下から透けてみえる、色白の肌目の細かな肌と、汚れを知らないように澄んだ眼と、ちょっとした身のこなしにもあらわれる素朴さが、この服を来年流行しそうな斬新なものにみせていた。

「東京はお暑うございますわね」

事務所の椅子に腰を下ろし、相手は額の汗をぬぐった。きれいな言葉だが、「東京」の「京」の字に、妙なアクセントがあるのは、やはり東北生れは争えないものだといわざるを得ない。

「青森からいらっしゃったんですね？」

デスクの上の書類をみつめて、私立探偵、大前田英策は、ひとりごとのようにつぶやいた。

この娘の顔色では、もちろん事件を頼みに来たのだろうが、今のところ旅行は厭だった。

たしかに青森は涼しいかも知れないが、途中の旅は長過ぎる。それに、この頃では、仕事も山のようにたまっていることだから、あまり地方へ出張したくはなかったのだ。

「青森市長島町二九六番地 増長栄子（二〇）」

と書いてある、受付の依頼カードをまさぐりながら、

「ところで、御用件は？」

「わたくしのことではありませんの。姉の離婚問題のことに、先生のお力をお借りしたいと思ひまして」

英策はまた大きく溜息をついた。

眼の前のこの栄子という女には、一眼でそれと分るくらい、娘々したところがある。もちろん、男を知った女とは思えないが、処女というものは、ある場合には、人妻よりも、娼婦よりも、一事に執着すると、しつこいものなのだし、姉の離婚問題を私立探偵に相談しに来るということは、ちょっと出過ぎた真似のようにも思われた。

「ここへあなたがいらっしゃるということは、お姉さん、御本人も御承知の上のことですか？」

「いいえ、わたくしの一存でおうかがいいいたしました」

「それでは、御両親は御承諾済みですか？」

「いいえ……」

相手はよほど、思い詰めているようだった。

短い言葉の端々にも、まるで刃のような鋭さがある。

英策は、相手の張りつめた気持をそらすように、煙草たばこをくわえて火をつけながら、

「お嬢さんは、そういうことに首を突っこまれるには、少しお若すぎはしませんか？」

「わたくし、子供ではないつもりです」

「御自分ではそう思っておいででも、第三者が公平に見たところでは……男女の間の愛情の機微きびというものは、なかなか、他人には分らないものですからね。もちろん、いまは修身科というものはないでしょうが、そういう教育を受けた我々でも、実際問題になってくると、なかなか教科書に書いてある理屈の通りにはいかないものですよ。自分では、愛欲どう欲の泥沼どろぬまの中へ足を突っこみ、身をもって、人生の裏表も、いわゆる酸すいも甘いも噛かみ分けたようなつもりだったとしても、案外他人の問題に対しては正当な批判もできないものなのです。そうかと思うと、逆に岡目八目おかめはちもくで、人の行動に対してはなんとか批判ができたとしても、さて、今度は自分がもう一度、そういう羽目うめに追いこまれると、またしても同じような間違いを繰り返す——誰だれかが、すべての人間は『性痴』だといいましたけれど、性痴——つまり、音痴とか、白痴とかの類語のつもりでしょうが、うまいことをいったものですね。人間というものはセックスに関するかぎり、白痴同様の存在存在でしかないのですな」

「それでは、わたくしには、そういうことをお願いするだけの資格がないとでもおっしゃるのですか？」

「そこまで申しては言い過ぎでしょうが、あなたもこれから何年かして、人の奥さんになり、

男というものをもう少し身近から観察なさるようにならば、今の問題にしたところで、もう少し、別の角度から解釈出来はしないかと思ひましてね」

英策は、回転椅子にもたれて、またゆっくりと煙草の煙を吐き出していたが、栄子の方は、いよいよじれてきたようだった。

「理屈としては、先生のおっしゃることもよく分りますわ。でも、ああいう男は人間の屑です……いや、人間というよりも、鬼か悪魔の生れかわりです。なんとかして、復讐をしてやらなければ、わたくしの心がおさまりません。先生がお引受け下さらなければ、わたくし、ほかへ参ります」

「これはまた、手厳しいことをおっしゃるものですね。復讐などという言葉は、ちょっと穏やかではないけれど、僕にピストルでも持たせて、相手の男に一発お見舞いさせようというんじゃないんです」

英策は笑った。ただ、笑いながらも、この娘にはもう少しつきあってやらなければならぬという同情に似た気持ちもおこった。

「そんなこと——ただ、わたくしは、このまま泣寝入りしたくないんです。あの男が、どうして姉をああいいう体にして、それで捨てようとする気になったか、その秘密が、そのわけが知りたんです。それがはっきりするまでは、わたくし国へも帰れません。両親に何と報告したらいいか、それさえわからないんです」

「お姉さんは東京ですか？」

「ええ、大泉の——映画の撮影所がございましょう。あの近くに」

「いま、あなたはああいう体とおっしゃいましたね。それは、妊娠という意味ですか？」

「いいえ」

「それでは？」

栄子はちよつとためらっていた。なにかしら、処女としては、いいにくい言葉を口にしなければならぬように、もそもぞしていた。

「まさか、旦那さんが麻薬中毒かなにかになって、あなたの姉さんをも、道づれにしたわけじゃないでしょうね。俗に、麻薬夫婦という言葉もあるけれども、夫婦の一方が、ああいうものの中毒にかかると、相手もそういう患者にしてしまわねば、承知できないようですが」

「違います。それだったら、まだ、お医者様にかけて、もとの体にすることもできないわけはないでしょう」

「それでは？」

またしても栄子は一、二分黙りこんだ。顔色がなんとなく青ざめ、両方の眼尻が急に吊り上り、唇の端がびくびく痙攣したかと思うと、急に吐き出すような口調で、

「姉は——刺青をさせられているんです」

「刺青を？」

ここまでは、さすがに英策も予想していなかった。思わずデスクの上に散った煙草の灰を、手で払いのけながら、

「それは大きなものですか？　小さな、たとえば人の名前位のものだったら、なんとか手術で消せますが、もちろん痕跡こんせきは残るとしても、それだったら」

「だめなんです……小さなものなら、私の皮を取って、移植しても、もとの体にしてやりたいと思いますけれども」

まぶたから急に、大粒の涙があふれて、その美しい頬ほおに伝わった。

「両腕から背中一杯——となつては、それも無理でございましょう」

「確かに……」

英策は大きく溜息をつきながら、

「どうしてまた、そんな真似をなさったもんですかね。刺青も、小さなものだったらともかく、そんな大きなものになると、一日や二日じゃ出来ませんよ。小説や講談なんかに出てくるように、おさえつけたり、麻酔剤をかがせたりして彫はれるものでもなし、御本人の得心ずくのこととしか僕には考えられませんかね」

「姉も、今更しかたがないと申しておりますわ。そのことについては何もいわないで——逃げようとしているんです。でも、わたしとしては、それを黙って、見ているわけには参りません」

「微妙な……一口には、何ともいいきれない問題ですね」

英策は、私立探偵という立場を離れて、一人の人間として、この問題の処置に迷った。でも、すぐには、どうしろという指図もでてこないの、間をおくために、

「でも、それがどうして分ったのです？」

とたずねてみた。

「わたくし、東京へ参りましてから、大泉の姉の家にとまっております。義兄は、この頃全然家へ帰って参りませんから、二人、同じ蚊帳かやの中に寝ておりますけれど、一昨日の晩、何か妙な物音がするので、眼をさしましたの。そうしたら……」

「その物音といえますと？」

「さあ……誰かが雨戸をたたいている音のような気もしましたけれど、何しろ夢うつつとでもいうような状態でしたし、はっきりしたことはいえません。そっと耳をすましましたけれども、何も聞こえませんし、犬でもふざけているのかと思いつながら、お手洗いへ立とうとして、枕元のスタンドをつけたら。その時に」

「見えたのですね。刺青が？」

「そうなんです。あの晩は寝苦しゅうございましたから、布団ふとんの上に腕が出ていて、寝巻の袖そでから……」

栄子はごくりとつばをのみ込んだ。

「わたくし、はっといたしました。最初は何がなんだか分らないで——着物の染めが悪くって、

色が落ちたんだろうかなどと、妙なことでまで考えましたけれど、そのうちに刺青だということが分って、心臓もとまるような気持ちがいたしました」

「なるほど、なにも知らないお嬢さんのあなたが、そんなものを見せつけられたなら、びっくりするな——という方が無理ですね」

合の手を入れながら、英策は次の方針を頭に思案し続けていた。

「僕はいま、ちょっと妙なことに思いついたんですよ。北国では、寒さに対する抵抗力をつけようとするのが目的でしょうか、男も女も、モンロー主義で——つまり、女優のマリリン・モンローのように、寝巻を着ないで素裸で布団に入るといふ風習があると聞きましたが、そういうことではないのですか？ いや、これは余計なことのようにですが、そういう習慣があるとしたなら、お姉さんが、寝巻を着て寝るのをみたら、なんとなく不自然に思ひになったでしょうからね」

「むかしはたしかにそういう習慣もあったようですけれど、今は、そんなことも」

栄子はいかにも娘らしく頬を赤らめて答えた。

「それで、あなたはお姉さんの刺青をごらんになってどうなさいました？」

「一晩寝られませんでした。よっぽどその場で起して、わけをたずねようかとも思いました。でも姉がこの離婚のことで動揺しているのは間違いないありませんし、急にたたき起してわめき散らすのもどうかと思って、無理に我慢をしたんです」

「それで？」

「朝は狸寝入りたぬきねいりをしていました。姉はわたくしが寝ているとみて安心したらしく、納戸なんどへ行って着替えしていました。そういえば、この暑いのに、袖が肘ひじのあたりまであるような洋服を着ているのがおかしいと思っていましたけれど」

「それで？」

「昨日いっぱい、姉は外出して帰って来ませんでした。一日中、わたくしも思案しましたけれど、良い考えも浮びません。でも、出来るだけ自然に、これを見つけたようなふりをする方が、姉の心を傷つけないでもすむ——と考えたものですから」

「あなたはお年にも似合わず、考え方は大人のようにすな」

栄子は笑いもしなかった。頬のあたりの筋肉をいくらか、こわばらせながら、

「帰るまでにお風呂ふろはわかしておきましたの、それから姉が入るのを待って、姉さん、わたしもいっしょに入るわ、甘えたような声を出して、お風呂に飛び込んだんです」

「姉さんも用心はしていたんでしょうけれど、まさかという油断があったんでしょうな。それで？」

「姉はこっちを向いて、湯槽ゆねの中につかっておりましたけれど、さすがにびっくりしたようでした。でも、そうなつては、もうどうにもかくし切れませんわね。まるで、やけくそのように笑って、

——栄ちゃん、あなた、刺青のことを知ってるんじゃない？

とたずねてきたんです。

——ええ、見せて。

とわたくしがいうと、また姉はさびしそうに笑いました。

——見たかったら見せてあげるわ。どう、きれいでしょう。

——いって、お風呂から上ると、わたくしの方に背中を向けました。もっと、毒々しいものかと思っていましたけれど、案外きれいなものでしたわ。赤や、紫や、黄色や、緑や、沢山色たくさんが入っていて——でも、やっぱり、覚悟をきめているとはいっても、その時は心臓もとまるのではないかと思った位です」

英策は、新しい煙草に火をつけてうなずいた。相手はこれを、話を進めるようにというサインだをとったらしく、すぐに言葉を続けだした。

「わたしはすぐにたずねました。

——きれいだわ。とってもきれい。だけど、どうしてこんな真似をしたの？

姉は笑ったきり、返事もしません。

——痛かったでしょう。でも、こんなきれいなものだったら、素人には彫れやしないでしょう。いったい、誰に彫ってもらったの。

と聞いたら初めて、

——新宿にいる駒子さんこまこという、女の刺青師に彫ってもらったのよ。女は女同士の方がよいと

思つて。

「いったんです」

「女の刺青師？」

「御存じですか？」

「いや、僕も浅学非才の悲しさで、明治以来、日本に女の刺青師がいるという話は聞いたことがないんですよ。なにしろ、あの仕事は絵をかくのとは違って、大変体力や精力を消耗する仕事のようにだし、戦争前までは法律で禁止されていた仕事だし、それに裸の男の体をいじりまわしている中には、自然に情も移ってきましようし、女につとまる職業だとは考えられないんですがね。それで、姉さんは、それをなさった理由を何か聞いていましたか？」

「わたくしは、しつこいと思われるくらい食い下がってみましたけれど、はっきりしたことはわからないんです。女というものは、どうしても男の好きなような色に染められてしまうことになるからと、そういつていただけでした」

「それは、男女の仲に関する限り、一般的な心理には違いありませんが、女というものは、よくよく男に惚れこまないと、その線は踏みこえられないものじゃありませんからね。お子さんは？」

「ございません」

「籍は？」